

## 安倍首相の言う美しい国とは

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

4月23日、外国歴訪を前にした安倍首相夫妻とのインタビューが読売テレビのリアルタイムで放送されました。

G8サミットの開催地に洞爺湖畔を選んだ安倍首相は、その動機として、「美しい国を見せるために」というような説明をしていました。

私は、首相の書いた『美しい国へ』という本を以前に読みましたが、この「美しい国」という首相のモットーがいまひとつピンときませんでした。分かるようで分からない、何かボウバクとした言葉のように思えたのです。

恐らく「あらゆる意味で美しい国」ということなのだろうと、自分勝手に解釈していたのですが、今日初めて、その具体的な用例の一つに出会ったのです。

美しい国のシンボルとして洞爺湖を考えているのだとしたら、その美しさというのは自然の景観ということなのでしょう。しかし、首相の言う「美しさ」が、見た目には美しいという意味だけで収まるはずがないと思いますから、それは様々な意味での美しさの中の一つなのでしょう。

見た目に美しいという、形としての意味だけではなく、内容としての美しさもそこに読み取らねばならないと思うのですが、それはいったい何なのでしょう。

洞爺町長がさっそく「経済効果」を期待するという感想を述べていましたが、なるほど「美しさ」は金儲けに結びつくのかと、これぞリアリストの判断かと思ったものです。

しかし、安倍首相の言う「美しい国」が、観光立国のできる国などという俗っぽい理想にとどまっているはずがありません。

番組では、首相に寄せられた色々な層からの意見が紹介されていましたが、その中には、これを機会に環境問題をアピールしてほしいという言葉もありました。

しかし、それを「美しい国」の理想と結びつけるには、やはり形だけの、部分的なイメージにとどまっているようで、いかにも弱いといった感じがします。

面白かったのは、幼稚園か小学校一年ぐらいの男児が言った言葉で、「みんな優しい国にしてください」という首相への注文でした。

「優しい国」を「美しい国」に引っかけて言ったのかどうかは分かりませんが、もしそうだとしたら驚きです。まさにズバリと、子供は精神の高揚という具体的な意味を、「美しい国」の理想に与えていると言えます。

みんなが優しくなる国家。平和な国家。これこそは、日本が国際社会にアピールできる理想の一つと言えましょう。もちろん、そのためには、環境問題についての寄与も、さらにはその手段となる経済政策も無視できるものではないのですが。

子供の「優しい国」という発想に対して、教育現場からの視野に立って、さらに具体的な表現を加えたのは、乙武洋匡さんでした。

「幸せな国にしてほしい」というのが、乙武さんの首相に対する注文でした。この発言は、子供たちの意見を聞いて成されたものではありませんが、実にタイミングの良いところで出てきました。

子供たちは、優しさが何かということをよく知っています。しかし、それを言葉として知っていることと、実践することは別だと言うことができます。

乙武さんによれば、重い荷物を持って困っているお婆さんを見たらどうするかと子供に尋ねますと、「助けてあげる」とみんながすぐに答えます。しかし、みんながすぐにそれを実行できるかどうか問題だと言います。

教師は、知識を与えるばかりではなく、それを実践に結びつけることを教えねばならないというのが、乙武さんの意見でした。

「美しい国」「優しい国」といった理想を観念的なものにとどめず、実践の伴った真に「幸せな国」にすること。これは、教育現場に立つと同時に、自身が身体的な重い負担を荷っている乙武さんならではの、結論に近い発言だと言えましょう。

なぜ私たちは、「美しい国」「優しい国」「幸せな国」を目指すのでしょうか。それが「良い」からです。しかし、なぜ「良い」はヨイのでしょうか。

善悪の基準となる私たちの直感を求めれば、それはキレイかキタナイかという判断に行き着きます。私たちは、ヨイものをキレイと感じます。決してキタナイとは感じません。

人間の最終的な判断が「清潔」か「不潔」かの直感によるものであることを私は強調したいと思っています。これまでの哲学が知らなかった「清潔の哲学」の重要性を強調したいのです。

先ほど述べた「経済効果」が理想になり得ないのは、キレイな儲けもあれば、キタナイ儲けもあるからです。心身両面について、根源的な意味で、キレイとしか言えないものが、良いものなのです。

その意味で、「美しい国」「優しい国」「幸せな国」「平和な国」とは、何よりも「清潔な国」ということを根本理念にしていると言わなければなりません。

「清潔な人生、清潔な企業、清潔な社会、清潔な国家、清潔な世界、そして清潔な宇宙。人間の文化が求めるものは、これ以外にあるだろうか」と私は書いたことがありますが、ここにこそ、私たちが自然に求めているものの直感があると言えます(『清潔マニアの快的人生—永遠のキレイを求めて』ビワコ・エディション版123頁)。

[2007/05/05 magmag]